

障がい児(者)への運動支援体制構築に向けた現状と課題 — ユニファイドスポーツフェスティバル2017 in Miyazakiの 開催を通してみえてきたこと —

The Current status and Issues Regarding the Construct Exercise Support System for Children and Adults with Disabilities

山内 通恵¹⁾・吉永 砂織¹⁾・蒲原 真澄¹⁾・内田 倫子²⁾・澤田 浩武³⁾・鶴田 来美¹⁾

Michie Yamauchi・Saori Yoshinaga・Masumi Kamohara

Rinko Uchida・Hirotake Sawada・Kurumi Tsuruta

キーワード：障がい児(者), 運動, 支援体制構築

children and adults with disabilities , exercise , construct exercise support system

I. はじめに

子どもの運動は、年齢に応じた成長発達の中で「バランス力」「俊敏性」「持久力」「筋力」の向上には欠かせないものである。また、身体面への効果にとどまらず、運動による爽快感がストレスの軽減となることや、やり遂げる楽しみや達成感、精神面への効果も大きい。これに加え、運動を通じた他者との交流は、協調性や社会性を養うことができることから、子どもの健やかな成長・発達に対する運動効果への関心や期待は非常に高い。

近年、ダウン症児が運動に取り組むことによる身体能力の向上や苦手意識の改善、知的障がいに伴う合併症の予防や生活能力の向上効果が明らかになりつつあり(早川ら,2010)、これと並行するように、障がい児教育における運動の必要性が提唱されはじめている。また、障がいを持ちながら日常的

に運動を実践している人たちは、運動習慣を「残された機能を低下させないためにも、自分たち障がい者は生涯運動を継続しなければならない」といった重要な健康維持対策と捉えている。一方で、障がいを持った子どもたちにとって、精神的・身体的問題は運動への参加を困難にさせていることも明らかである(守田ら,2004;奥住ら,2009)。また、我々のインタビュー調査により、「一緒に運動できる仲間が近くにいない」、「障がい者が運動できる施設が少ない」といった運動のきっかけや継続を困難とする様々な声が聞かれている。

看護の活動場面は病院や福祉施設だけにとどまらず、地域社会の中で人々が必要とする課題を多角的な視点から見出し、人々の生活を支援していく役割がある。その役割には、対象とする障がい児(者)のみならず、その支援者にも目を向け、連携・支援し

1) 宮崎大学医学部看護学科 地域・精神看護学講座
School of Nursing , Faculty of Medicine , University of Miyazaki

2) 宮崎大学医学部看護学科 成人・老年看護学講座
School of Nursing , Faculty of Medicine , University of Miyazaki

3) 宮崎大学医学部看護学科 基礎看護学講座
School of Nursing , Faculty of Medicine , University of Miyazaki

ていくことが必要とされており、障がい児(者)の運動習慣の確立と継続につながる支援体制を構築・強化していくことが課題であると考え。これまでに、障がい者の運動支援の取り組みに関する現状と課題について、様々な障がいを持つ者と行政や障がい者スポーツ協会等の関係機関との合同勉強会を実施した。その中で、障がいの有無に関わらず一緒に運動を始める契機として、何ができるのか、運動に必要な要素は何かを見出すためのスポーツイベントが提案された。

今回、我々は宮崎県内のスポーツクラブ、都農町役場と連携し、身体(視覚、聴覚、肢体)・知的障がい児(者)とその保護者への運動支援体制構築に向けた活動のきっかけ作りとして「ユニファイドスポーツフェスティバル2017 in Miyazaki」を都農町藤見運動公園にて開催した(写真1、写真2)。その活動経過をまとめ、今後の障がい児(者)の運動支援体制に関する課題について検討したので報告する。



写真1. フェスティバル参加者



写真2. イベントサポーター

II. 「ユニファイドスポーツフェスティバル2017 in Miyazaki」の開催

1. フェスティバルの目的

様々な障がい児(者)、および健常者がサッカーを通してともに楽しむ時間を共有するとともに、障がい児(者)にとっての運動の意義や、障がいの理解を深める。

2. 日時及び開催場所

2017年12月16日～17日、都農町藤見運動公園

3. 参加者

主催：一般社団法人宮崎県サッカー協会

共催：都農町役場、宮崎大学、

株式会社テゲバジャーロ宮崎

参加者・関係機関：

身体(視覚、聴覚、肢体)・知的障がい児(者)と保護者、宮崎県内のスポーツクラブチーム、特別支援学校教諭、宮崎県障がい者スポーツ協会、宮崎県障がい福祉課、都農町役場、宮崎大学(医学部看護学科、工学部、産学・地域連携センター、障がい学生支援室)など約100名。

4. フェスティバルのスケジュール

【1日目】

9:00～ 都農町、宮崎大学、テゲバジャーロ宮崎の運営スタッフによる会場設営

12:00～ 参加者の受付開始

13:00～ 開会式

準備運動(アイスブレイク:しっぽ取りゲーム)

13:40～ 試合開始 (1試合:10分-休憩5分-10分、1チーム2試合総当たり戦)

15:10～ エキシビジョンマッチ

○ 小学生ロービジョンフットサルチーム 対 参加小学生

○ 知的障がい者 対 アンパティサッカーチーム(日本代表選手)

18:30～ 懇親会および意見交換会

【2日目】

9:30～ 準備運動

9:45～ 参加者と聴覚障がい者によるデフサッカー体験

10:15～ 試合開始(1試合:10分-休憩5分-10分、1チーム3試合総当たり戦)

12:45～ 表彰式及び閉会式

5. 取り組み場面ごとに見えてきた支援の必要性和課題

1) チーム編成

今回、事前に参加人数を把握し、年齢・性別は問わず様々な障がいをもつ児(者)と健常者、運動やサッカー経験の有る者と無い者を混合し、6チームに編成した。参加者は全員、チームカラーを取り入れたオリジナルウェアを着用した。ほとんどの参加者が初対面であることから、胸にはニックネームを記したネームテープを貼付した。同じカラーのウェアを着用し、ニックネームで呼びあうことで仲間意識が形成され、仲間同士で助け合いながら一緒にグラウンドを整備するなど、徐々に連帯感が深まっていった。また、勝敗を競う試合形式はチームの結束作りに繋がっていた。

2) アイスブレイク

初日の開会式において、初対面である仲間とコミュニケーションを取りやすい雰囲気をつくり、チームの結束力を高める一助となるような「しっぽとりゲーム」を企画した。このゲームは、チームごとに列を作り、最後の者につけたしっぽとなる紐を奪い合うゲームである。ゲーム開始前に各チームで自己紹介や作戦タイムを設け、メンバーの障がいの状況に応じた位置などを話し合い全員が参加できていた。先頭者は列をつくるチームの状況を考慮しつつ、他チームのしっぽをとるために積極的に走り回り、ゲーム中はあちこちから掛け声や笑い声が聞かれ、ゲーム終了後には皆が息を切らしていた。アイスブレイクは体が温まるといった準備運動のみならず、仲間づくりや相手の状況を理解しながら、自身のチームでの役割を考える事に繋がっていた。

3) 試合の実際

アイスブレイクにより、チームに分かれてからの練習において、互いに打ち解けることができ、パス回しなどでも声を掛け合いやすい関係性を築くことができていた。作戦会議においても、チーム内でサッカー経験者がリーダーとなり、障がいや経験に応じ各自ができることを相談しながらポジション決めが行われていた。また、事前に仲間意識がそなわっていたことで、試合で負けた後、感情のコントロールができず大声を出し感情をあらわにする子どももいたが、

障がいに関係なく互いにねぎらいの言葉かけをしたり、慰めあったりしながら感情のコントロールに努める行動がみられた。その場に保護者や指導者となる大人がいなくても、子ども同士で仲間意識をもち、次の試合へのやる気を起こす行動がみられたことは、運動を通じて社会性や仲間としての協調性、また感情のコントロール方法を習得することにつながったと考える。

弱視の子どもの参加時は、鈴入りのサッカーボールを使用した。音のなるボールを使用したものの、試合中はチームメンバー内で協力して声を掛け合いながら蹴る方向を知らせ、蹴る方向を間違えずプレイができていた。聴覚障がい者の参加時には、フラッグの使い方に注意し、敵チームであっても身振り手振りでルールを伝えあい、試合をスムーズに行っていた。今回、手話通訳者が一人しかいなかったが、聴覚障がい者から皆にも応援する手話を知ってほしいとの要望があり、参加者へ「がんばれ」「楽しい」「拍手」など誰でもできる簡単な手話を伝えることで、みんなが応援できる機会となった。障がいの違いによる試合中のコミュニケーション方法はそれぞれ違っていたが、参加者がお互いを尊重した方法で試合に参加し、楽しく臨むことができたことで大きな怪我もなく試合がスムーズに進行できたと考える。

4) 救護の実際(看護師の立場から)

2日間で延べ4名の救護を行った。フェスティバル1日目では、試合中に膝の痛みを訴え、処置の希望があり、冷湿布の貼付とサポーターにて膝を固定した。膝の手術既往があったため、終了後はかかりつけ医の受診を勧めた(1人目)。2人目は、試合中に左拇指を突き指したため、処置の希望があった。冷湿布を貼付し、テーピングを行った後、予定の試合に出場した。2日目は、前日に突き指の処置をした者と同一人物が、試合前に前日の突き指に対し、再処置の希望あり、テーピングを行った(3人目)。4人目は、2日目の第二試合終了時、試合中の転倒にて右膝に外傷を負ったため、処置の希望があった。軽度の擦過傷で、滲む程度の出血がみられた。処置は、流水にて洗浄を行った。しかし、「ガーゼをしてほしい」との希望がありガーゼ保護を行い、予定の試合に出場した。

1人目は健常者であった。2人目、3人目、4人目は同一人物で知的障がいがあり、怪我の処置に対するこだわりがみられた。本人の納得がいくように処置をすることで、予定されていた試合に出場することができた。また、普段からサッカーチームに所属しており、処置を行った後は普段通りにサッカーの試合に出場することができていた。

救護の場面から、医療職者は障がい者スポーツを支援する際、医療処置の必要性が乏しいと判断しても、本人の訴えを十分に聴き、納得のいく対応を行うことでスポーツの継続が可能となることがわかった。また、知的障がい児(者)は、言葉での表現や表情の変化が乏しく、受傷の状況や痛みの程度を把握しにくい状況があると考えられる。そのため、障がいの特性を理解し、処置時はわかりやすい説明や「はい」「いいえ」など簡単な表現で答えられるような質問で受傷の状況を把握していく必要がある。加えて処置後の経過観察を行い、必要に応じて受診を促していく必要がある。

今回、参加者が約100名の中で医療処置を必要とした者は延べ4名であり、いずれの者に対してもすぐにその場で応急処置ができたことは、参加者への安心感につながったと考える。スポーツイベント開催において応急処置に対応できる医療関係者が存在することは、参加者が安心して試合に参加できる一要因でもあり、その確保は重要と考える。

5) 医療的相談(医師の立場から)

1日目の懇親会で、運動(特に下肢を動かす運動)の内分泌学的な効果(炎症性サイトカイン、免疫、認知機能)を説明した。その後の参加者および家族からの相談内容は以下のものがあつた。

(1) 弱視の子どもの母から

現在の眼科診療体制には満足している。ただし、普通学校は障がいを持った子どもへの対応が不十分である。対応が十分な視覚支援学校に通学した場合、運動を含む行動や教育の内容が限定され、多様な生活を送ることが困難である。現在、普通学校に通い、いろいろ配慮してもらっていることに感謝しているが、学校生活の困難は多い。この意見を受け、今後、普通学校の障がい児に対する対応と、支援学校での教育および活動プログラムの拡大を検討する

必要があると思われた。

(2) アンパティサッカーの選手から

足肢、手肢を切断するに至った原因は、事故もしくは骨肉腫がほとんどであり、おおむね手足切断に対する受け入れは良好とみられた。しかし、劇症型溶血性連鎖球菌感染症による壊死性筋膜炎(通称、人食いバクテリア)で手肢を2年前に切断した男性は、本人の意思が確認されないまま(麻酔鎮静下)に切断されていた。どうして、自分がこの様な疾患になってしまったのか、切断を避けることはできなかったのかについて受け入れきれず、相談を受け、説明した。切断前だけでなく切断後も疾患に対する正しい知識や必要な知識を与える機会が必要と思われた。

アンパティサッカーは、切断前に競技していたサッカーを切断後も継続している、いわゆる経験者がほとんどであった(写真3、写真4)。自ら経験してみたが、松葉杖を支点にボールを蹴ることは非常に困難で、体力的にもかなりハードであった。選手に聞く



写真3. 対戦試合の様子



写真4. アンパティサッカー選手によるエキシビジョンマッチ

と、レクリエーションや体を動かすために参加した障がい者は、しばしばアンプティサッカーを断念することであり、障がい者(四肢切断者)の運動習慣の確立と継続のためには、アンプティサッカーより運動強度が軽度な運動や、技術や体力がなくてもサッカーができるような補助器具やルールの検討が必要であると思われた。

6) 懇親会での意見及び質問紙調査結果

懇親会参加者約60名に対し、今回のイベントに参加した理由について質問紙調査を行った(表1)。

その結果、「障がい者スポーツに興味があったから」が15名、次に「体を動かすことが好きだから」「友人に誘われたから」がそれぞれ10名、「家族が申し込んだ」が8名であり、スポーツ・運動への興味や関心が多かった。参加の満足度は約9割が、大変満足・満足と回答していた。意見交換では、障がいを持った子どもたち全員から「楽しかった。」「また参加したい。」との意見や、見学していた保護者からも「子どもたちが楽しそうにプレイする姿を見て“こんなこともできるようになっている”といった気づきになり子どもの成長を発見できる場となった。」「これまで、障がいがあるため積極的に運動には参加させていなかったが“普通の子どもたちと一緒に走る

ことができる”“楽しそうにみんなで声を上げて笑えた”ことが何より嬉しかったし、その場に他の子どもたちと自分の子どもも一緒にいて、同じようにできることが嬉しかった。」といった意見が聞かれた。

「今後も参加したいか」についての質問に対しては、93.6%の者が「はい」と回答しており、障がい者スポーツ継続の必要性が示されたと考える。

「障がい児(者)スポーツの取り組みには、今後どのような活動や支援が必要か」の質問についての自由記載では、様々な意見があった。その多くは広報活動や周囲のサポートといった「障がい児(者)スポーツへの理解と関心」、環境づくりや活動場所といった「活動の場、資金、移動手段」、定期的な練習や参加機会といった「定期的な開催」、手話通訳などの「コミュニケーションツール」であった(表2)。障がい児(者)スポーツへの理解と関心を広げるためには、地域の理解と協力を得ることが重要であり、今回のフェスティバルでは、行政や大学機関がその役割を担った。また、様々な障がいを持つ者が一堂に参加する中で、コミュニケーションのトラブルはなかったが、手話通訳など誰もが身近にできるコミュニケーション方法の普及が必要と感じた。さらに、定期的な練習や運動参加機会への支援にあ

表1 ユニファイドスポーツフェスティバル参加について(複数回答)

n=47

	項目	人数	%
参加した理由	障がい者スポーツに興味があった	15	31.9
	体を動かすことが好きだから	10	21.3
	友人に誘われたから	10	21.3
	家族が申し込んだから	8	17.0
	その他	15	31.9
参加していかがでしたか	大変満足	28	59.6
	満足	15	31.9
	ふつう	2	4.3
	やや不満	1	2.1
	不満	0	0
今後も参加したいと思いますか	未記入	1	2.1
	はい	44	93.6
	いいえ	0	0
	未記入	3	6.4

たっては、専門的な運動指導ができる指導者の育成も必要と考える。

今回、様々な障がいを持った者が一堂に会する機会となり、サポートしていく保護者、特別支援学校関係者、スポーツクラブ関係者、行政と大学関係者それぞれに役割を分担し、連携しながら支援につなげていく必要性が見出された。保護者では障がい児(者)の身近にいるサポーターとして日常生活を支える中で、子どもたちにとっての運動の必要性を理解し、「今後も参加したい」という気持ちを手助けすることが求められていると感じた。また、障がいを理解

した上で、対応できる医療関係者の存在はもちろんのこと、専門職者がそれぞれの場面で存在することで安心して参加できる要因となることが考えられた。大学は研究機関としても障がい児(者)の生活や運動を支援するための道具の開発や、医療的サポートなど専門的立場でのサポートが求められることが分かった。今後は、フェスティバルの企画運営から見えてきた現状や課題を発信していき、障がい児(者)の理解を促す啓発活動を推進していく必要性を感じた。

表2 障がい児(者)の運動の取り組みに必要な活動や支援(自由記載をそのまま引用)

【障がい児(者)の運動への理解と関心】

- ・広報活動(障がい者スポーツに関する)
- ・認知度をあげるための活動
- ・まわりのサポートと本人の積極的な参加意識をもたせる
- ・もっと色々な人や障がいのある人知ってもらえるようにする
- ・体験会などで競技を知ってもらう
- ・まずは知ってもらうことが大事で、その為にはこのようなイベントをいろいろな地域で行うことが良い
- ・もっと健全の方にも見て知っていただけるように、この様なイベントのアピールが必要
- ・体験や周知(情報発信)
- ・サポーターがもっと増える
- ・障がい者スポーツの認知度アップとルール理解
- ・フェスティバルの前に参加する障がい者の方についての勉強会があると、(障がいの状況を)理解してから試合にのぞめるのではないかな
- ・今回のイベントの様なことを各自治体ももっと積極的に宣伝して取り組むべき
- ・県や国がもっと目を向けて頂きたい
- ・今回の様なイベント(大会等含む)を行い普及、発展し、会社等からの理解、やりたい、やりやすい、楽しめる環境が必要だと思う
- ・他の障がいスポーツにも目を向けると良い

【活動の場、資金、移動手段】

- ・移動手段
- ・資金
- ・活動場所
- ・定期的に練習できる環境の提供
- ・もっと障がい児のスポーツができる場所が必要
- ・環境づくり、施設(グラウンド芝)

【定期的な開催】

- ・今後も年に1~2回してほしい
- ・定期的なフェスティバルの開催
- ・スポーツを通じて交流を深めるイベントをする
- ・3チームぐらいでもいいので、小さな予選大会が短い間隔で開催されると子供たちも楽しみの回数が増えると思う(年1回決勝大会と親善試合を同時開催など)
- ・重複障がい児・者が楽しめるスポーツが何なのかまだわからないが、応援の参加や身から参加できる(ちょっとでも手がだせる、意欲が出る)スポーツ参加の機会をまずつくってほしい

【コミュニケーションツール】

- ・手話通訳を派遣して頂けるとうれしい
- ・筆談(ホワイトボードやメモ等)
- ・コミュニケーションを向上するための活動

【その他の意見・感想】

- ・サッカーなら障がいがあっても出来る!! また、サッカーの楽しさをもっと伝えたい
- ・スタッフとして関わられる保護者を増やす
- ・今回は、すごく大きな大会になりましたが、次回が来年というのがさびしいです
- ・参加者が増加しても全員で楽しめそうなイベントだと思います

Ⅲ. 今後の展望

障がい児(者)の運動支援体制構築に向け、これまで関係職者間での勉強会を行い、「ユニファイドスポーツフェスティバル」の実施に至った。我々は障がい児(者)にとって運動は、リハビリテーションの意義が大きいと理解していた。しかし、運動は機能の回復や体力づくりにとどまらず、やりがいや、楽しみを感じる機会となった。また、参加した者同士がサッカーにおいては相手チームのゴールにシュートするという共通の目的を持つことで、団結しコミュニケーションを取りあった。このような活動において仲間づくりなど、社会的、精神的な効果が得られたと考える。障がい児(者)が運動を行うことは、健常児同様、子どもの成長・発達を促進するために重要である。運動を通して、保護者は子どもたちの“できる”という可能性を見出していた。今まで障がいをネガティブに捉え、運動を始められなかった保護者の“障がいを持つ子どもが運動をすることに対する考え方”を変えるきっかけになったと考える。

これまでは障がいがあることで、運動に関する情報や仲間、活動できる場所がないなど、運動に参加する機会が得られにくい状況があった。障がい児(者)運動を促進するためには、障がいの有無に関わらない運動ができる施設環境の整備や、一緒に運動をする仲間づくりの構築が必要であると考え。

今回のイベントでは、医師をはじめ看護師、作業療法士など医療職者が確保されており、その場での医療処置ができ、参加者からは医療職者がいることへの安心感があった、との意見が聞かれた。障がい児(者)運動を支援していくためには、医療職者が運動の意義を理解し、人々に正しい知識や情報を伝達していくことが重要と考える。

今後は、できるだけ多くの人々にこのような活動を経験してもらい、障がい児(者)の運動に対する関心と理解を広めていくことが重要であると考え。また運動を継続していくためには、運動ができる環境づくり、安全に安心して運動に参加できるための医療職者の確保、障がい児(者)を理解した運動を指導できるコーチなど専門職者の確保が重要であり、これらの支援体制を整えていく必要がある。

Ⅳ. おわりに

今回、イベントの開催により障がい者スポーツ支援体制の現状と課題がみえてきた。今回の取り組みを契機にこれから障がい者、大学、地域の中の支援団体と一緒に障がい者も健常者も一緒に運動を楽しめる支援を検討していきたい。

また、今回の取り組みが参加した障がい児(者)の今後のライフスタイルにどのような効果をもたらすのか、定期的なイベント開催と繰り返しの参加で検証していきたい。

謝辞

本イベントにご協力くださいました皆様、ならびに協力施設の関係の皆様へ深く感謝申し上げます。なお、本イベントは、宮崎大学法人運営費機能強化経費「ロコモティブシンドローム(ロコモ)の病態解明・対策」により実施した。

文献

- 磯貝美奈, 小島道生(2013): ダウン症者の運動能力と支援に関する一考察, 岐阜大学教育学部教師教育研究, 9, 95-100
- 奥住秀之, 國分充, 平田正吾他(2009): 知的障害児における片足立ちと平均台歩きに関わる要因の検討, Equilibrium Research, 68 (2), 62-67
- 早川公康, 小林寛道(2010): 知的障がい児の身体・生活能力の変化-3年間の認知動作型トレーニング-, 発育発達研究, 46, 65-82
- 守田香奈子, 七木田敦(2004): 知的障害児のスポーツ活動への参加を規定する要因に関する調査研究-保護者への調査を通じたニーズの把握-, 障害児スポーツ科学, 2 (1), 70-75